



©Lusine Hovsep

Vardan Ovsepiyan

ヴァルダン・オヴセピアン

タチアナ・パーハと傑作『Lighthouse』を完成させたピアニスト。対位法を用いた演奏スタイルと作曲作風で、新しい表現を追求する。

文●濱瀬元彦
text by MOTOHIKO HAMASE

Vardan Ovsepien Discography



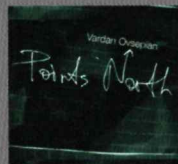
② 『Sketch Book』 (2002年)



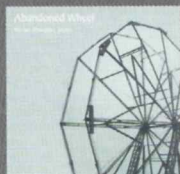
④ 『Aragast』 (2006年)



John O'Gallagher & Vardan Ovsepien
⑥ 『Nocturnal Prophecy』 (2011年)



⑧ 『Points North』 (2013年)



① 『Abandoned Wheel』 (2001年)



③ 『Akunc』 (2004年)



Vardan Ovsepien Chamber Ensemble
⑤ 『VOICE』 (2006年)



⑦ 『Chromaticity』 (2012年)

昨年、リリースされた『Lighthouse』という作品ではタチアナ・パーハの驚くべき歌唱のみならず、合衆国で活躍するヴァルダン・オヴセピエンというアルメリア出身のピアニストの演奏スタイルと作曲作風の新鮮さに驚かされた人は多いと思う。今回、彼の演奏スタイル、音楽的な方法などについて彼自身に、語ってもらった。

濱瀬 『Lighthouse』は素晴らしい作品でした。高度な作曲と素晴らしいピアノ、そして素晴らしい歌との組み合わせによって新しい形の表現が実現されたと思います。

左手と右手を対位的に使うあなたのピアノ・スタイルはジャズではこれまでになかったものだと思います。

ヴァルダン 音楽の勉強を始めたころから対位法を用いた音楽に強く惹かれました。即興技術を高めるためと、ポリフォニー音楽を生み出すために、両手を独立して動かせるよう何年も訓練しました。タチ

アナも私も対位法による音楽のすばらしさを感じていたので、『Lighthouse』はこうした技巧を発展させるには最良の機会だったのです。

濱瀬 そのような技法がどのようにして生まれてきたか、その過程を知りたいのですが、あなたはアルメニアのエレバン・ステート・コンセルヴァトリーオ (Yerevan State Conservatory) とエストニアのエストニア・ミュージック・アカデミー (Estonian Music Academy) で勉強されています。それぞれの大学ではどのようなことを学ばれたのでしょうか。

ヴァルダン アルメニアの音楽学校からエストニア・ミュージック・アカデミーに移った私は、現代音楽の作曲について勉強を続けました。この2つの学校では授業のやり方こそ違いましたが、私にとっては現代音楽の作曲とジャズ即興の間につながりを見つけたという、一つの継続的な営みでした。

濱瀬 クラシック、現代音楽の作曲を学ばれた後であなたはジャズに向かわれます

が、どのような契機があったのでしょうか。ヴァルダン 私にとってジャズ・インプロヴィゼーションは現代音楽の作曲からの移行というわけではありませんでした。

決して美化して言うわけではありませんが、音楽の道を進み始めた初期の段階で、私は作曲と演奏の一体化に強く惹かれました。それは自分の心に深く響いた原体験的なものでした。そのため、まだ学校で音楽の勉強をしていた頃の、かなり早い

段階から、未知の完全な音楽を作り上げたいという情熱は生まれていたのです。

濱瀬 あなたの「ミラー・エクササイズ」という両手を対称的に動かす演奏方法はあなたの対位的アプローチの極地を示すものです。聴いた印象ではジョルジュ・リゲティの「ピアノ・エチュード」と共通したものを感じますが、リゲティとの関連の有無を含め、「ミラー・エクササイズ」についてお聞かせ下さい。

©Lana Muriyan



Vardan Ovsopian

ヴァルダン リゲティの「ピアノ・エチュード」は好きです。本格的に勉強したわけではありませんが、この「エチュード」と私の「ミラー・エクササイズ」にはいくつかコンセプト的に似通った点があります。2、3例を挙げると複合的ハーモニー (complex harmony)、奇数拍のフレーズ構成、永続運動的 (perpetual motion) であること、などです。

濱瀬 あなたはピアノリストとしては少数派だと思うのですが、非常に美しい旋律ラインを作られます。旋律生成の方法について独自の考えがあるとお見受けしますが、よろしければお聞かせ下さい。

ヴァルダン 奇妙に聞こえるかもしれませんが、私は私にはきれいな旋律を生み出すために、概念的な理論の世界にかなり深く没入します。構造がしっかりしていれば、そこから美しい旋律は生まれてくるのです。

濱瀬 旋律を大切にされていることと関係すると思われませんが、あなたはジョン・リー、サラ・セルバ、モニカ・ユングヴェンソン、そしてタチアーナ・パーハなど多くの歌手と共演されています。あなたが歌あるいはヴォイスに寄せている特別の意味があればお聞かせ下さい。

ヴァルダン 作曲にボーカルメロディーを加えるのは、幼少の頃好きになつたいくつかの映画音楽の影響があると思います。



Vardan Ovsopian Chamber Ensemble
⑨『Dreaming Paris Theme And Variations』(2013年)



Tatiana Parra & Vardan Ovsopian
⑩『Lighthouse』(2014年)

1960年代から80年代のヨーロッパ映画、主にフランス映画です。特に、フランス人の作曲家、フランソワ・ド・ルーベのことが思い出されます。

濱瀬 最新作の『Lighthouse』ではブラジルの素晴らしい歌手、タチアーナ・パーハと共演されていますが、彼女と米国在住のあなたとはどのような出会いだったのでしょうか。

ヴァルダン タチアーナ・パーハとの共演は私の音楽キャリアの中で最も重要なものの一つに入ります。彼女の幼少期の友人である、素晴らしい建築家マリナ・コヘイアとボストンで出会い、彼女がタチアーナの音楽を紹介してくれたのです。それから何年も経った後、もう一人の素晴らしいブラジル人歌手／女優のタルマ・ヂ・フレイタスの助けもあり、私たちはタチアーナをロサンゼルスに招待し、デュオ演奏をやってみたのです。彼女と共演した時、その最初の瞬間からえもいわれぬ一体感をはつきりと感じました。今後も彼女と長きにわたって共演し続け、もつと沢山のレコーディングができればと思っています。

濱瀬 タチアーナ・パーハを加えたあなたの室内アンサンブル、VOCE (= Vardan Ovsopian Chamber Ensemble) のライブビデオをあなたのサイトで拝見しました。『Lighthouse』の楽曲が VOCE では素晴らしいアレンジが豪華な編成によって見事な音楽になっています。タチアーナ・パーハを加えた VOCE の録音作品を是非聴きたいですね。

ヴァルダン 言うまでもなく、室内楽団の録音ははるかに難しいものではありますが、できれば近い将来、タチアーナの参加も含めた VOCE の録音ができるよう、何らかの方法を考えているところです。

濱瀬 ありがとうございます。

ヴァルダン・オヴセピアン (左) とタチアーナ・パーハ (右)

©Sarah Hadley

